

医療ルネサンス No.6256

● ストーマと生きる 4/5

# 走り続けて理解広める

金沢大名誉教授(歯科口腔外科)の山本悦秀さん(70)は、2005年以降、

金沢大病院で3度のがん手術を受けた。最初は下行結腸にできた大腸がん。手術は成功したが、2年後、上部直腸に再発し、08年には肝臓に転移が見つかった。「5年生存率は20%〜50%」と主治医に宣告された。

それから8年。山本さんは元気に過ごしている。体内にがんの影はなく、東京都目黒区で歯科診療を続ける。不安にさいなまれた自身の闘病体験に学び、以前

にも増して、患者への声かけや丁寧な説明を心がけるようになった。

健康維持のため39歳で始めたランニングは今も欠かさない。10時以上のマラソン大会の出場は700回を超えた。「がんを克服出来たのはマラソンのおかげ」と考えている。数年前からは新たな役割を自分に課した。「オストメイトの広告塔になること」だ。

オストメイトは、大腸がんなどの手術で、腹部に排せつ口のストーマをつけた人たちのことだ。山本さん

は07年の2回目の手術の時につくった。仮のストーマで、いずれは残った腸管をつなぎ直し、閉鎖するはずだった。肝臓の切除手術から3年がたち、山本さんはストーマを閉じる手術を望んだが、主治医は表情を曇らせた。

「腸の状態が良くありません。無理につなぐと縫合不全や腹膜炎が起こり、命に関わる恐れがある」

「話が違う。仮設のはずではなかったのか……」

だが、すぐに気持ちを切り替えた。「生きられたことに感謝して、今の自分がができるか考えよう」

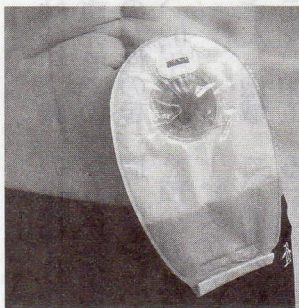
「オストメイトの認知度は、告白する人が少ないため現在も低い。パウチ(便を受ける袋)の洗浄装置を備えた障害者用トイレは普及したが、服を着ると障害者が分からないオストメイトが障害者用トイレを使うと、苦情を言われやすい状況が続いている。」

「オストメイトをもっと知ってもらうことが、患者であり、医療者でもある私の役割」。山本さんはそう考えた。著書でストーマのことを明かすと、テレビや雑誌の取材が相次いだ。近年のパウチの改良はめざましく、マラソンを走っても問題がないことを患者や社会に知らせることができたのは、大きな収穫だった。

「患者にとって、同じ病気の患者の情報がないことほど不安なことはない。これからも走れる限り走り続け、患者の可能性を広げる情報を発信し続けたい」



がんを乗り越え、ランニングを楽しむ山本さん(東京都目黒区)



山本さんの腹部のストーマとパウチ。パウチを写真のように少し傾けるとマラソン時も邪魔にならない